



TITLE:

<批評・紹介> 郭伯恭著「永樂大典考」

AUTHOR(S):

倉田, 淳之助

---

CITATION:

倉田, 淳之助. <批評・紹介> 郭伯恭著「永樂大典考」. 東洋史研究 1939, 4(3): 268-269

ISSUE DATE:

1939-03-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138782>

RIGHT:

## 批評・紹介

### 永樂大典考

郭伯恭著

四六版二三五頁、民國二十七年長沙商務印書館發行、國學小叢書之一、定價八角

郭氏は此の書に先立つ一年、四庫全書纂修考を著し顧頤剛氏の紹介で北平研究院より出版された。其の顧氏序に依つて、北京で修學し幾年か文學史を研究して居られることを知る以外餘り聞くところが無い。前著が自序にも云ふ如く、既得の資料に就いて整理し系統ある説明を與へんとする意圖に成つたと同じ目的、同じ手法で此の書も出來たものである。兩書の結構は兎も角、かくも短時日に乾隆の盛事、永樂の巨製纂修始末が次々に便利な單行本に纏められた事は感謝しなればならぬ。此の書、章を分つこと十、導言、纂定、纂修諸人攷略、體例、錄副、厄運、乾隆間之狀態、輯佚、散亡、餘論と先づ考察すべき範圍を盡して居るやうである。が此の書と共に前人の闡述も一覽するに

及んで遺憾の點も鮮くない。前人の所説は斷片的なものは暫く措き、纏つた解釋を施したものは、嘗つて翰林院に在り大典の盜竊さるゝ狀をも目覩せる繆荃孫の永樂大典考（國粹學報四十九期）が短篇ではあるが、既に研究の大項を掲げ、後の屋上屋を架するを能事と心得るものと比べて簡にして要を得たるを覺える。續いて袁同禮（學衡二）李正奮（圖書館學季刊一卷二期）にも永樂大典考あつて詳備を加へ、殊に袁氏は此の外現存卷目に、文獻に、輯本の缺點に非常な力を致して居る。尙孫壯が文獻を擧げ、趙萬里が輯出の佚書目を考證する等重要なものであるが、此の書は以上各家の蒐集せる資料は勿論、同時に所説の全篇或は數節を連引掇拾して何等の斷り書がない。偶々著者の立論斷案の如く見ゆるものがあるが、多くは字面そのまゝの借用である。例へば、第一章末の結論「帝即位、時不平之氣、徧於海宇、成祖知不可以力服、冀借稽古右文之舉、以消弭草野私議、於是召天下文學士、啓祕閣圖書、開館纂修永樂大典、陸文裕比之宋太宗、殆尤甚焉」といふのは李正奮の語である。同じ用語も文に従つて解釋に輕重を生ずる。李氏の場合は大局論であるが、此の著者は第二章に於

て洪武二十一年解縉が封事を上り類書の輯集を獻言したのを引き乍ら、佛作つて魂入れず、總て帝の黠心に歸して他に語る所がない。が古來裁定靖難の帝王が文治策を採るは理の當に然る所、其を喋々するより此の文治策に結付く儒臣が巨典の輯成を勸むるに至つた反面の情勢を明にすべきである。又第五章録副は資料の大部分は袁同禮の關於永樂大典之文獻（北平圖書館刊七卷五號）に採り章末の正副二本の辨は略々李正奮の文を寫して居る。第八章輯佚も亦袁同禮の四庫全書中永樂大典輯本之缺點（北平圖書館刊七卷五號）及び趙萬里の永樂大典內輯出之佚書目（北平圖書館月刊二卷三・四號）から出來上つたものである。これ等は直に氣付く例であるが、此の書が餘り創見を持たない以上批評も亦編纂の態度に止らざるを得ない。只第三章纂修諸人攷略は掲ぐる所百九十四人、著者の新に考見するもの百六十六人と言つて居るが圈點生にまで及び文集、行狀、墓銘等各種同架に羅列して所謂系統ある説明にまでには至つて居ない。末章餘論は祕府典籍の十五厄なるものを記して居るが、名の示す通り全くの贅物である。其れよりも殘卷書目を作るとか或は現存大典本の學問的價值に言及すべきである。目

録は少數の影印本及び善本書志或は劉氏嘉業堂藏四十種殘卷目錄（昭和十年北平人文科學研究所油印本、東方文化研究所藏）の如きものはあるが纏つて居ない。終りに趙萬里の永樂大典內輯出之佚書目が附録されて居る。數種を補はれたことは誠に結構ではあるが、版刻の闕を指摘し乍ら補つた所は四庫全書珍本初集本、叢書集成初編本、四明叢書本等多くは原目編纂後のものに過ぎないが尙補ひ得るものが相當ある上、原目には誤つて、無い版本が記入されて居るものが往々あるが一つも削られて居ない。更に原目の誤植が其のまゝである點から見て一通りの校訂さへも經ないものと思はれる。が著者も言ふ通り期間の短促を以てしては止むを得なかつたのであらう。如上の諸點を含んで讀めば此の書が一應從來の研究を整理したものとして先づ手引の役目を果すであらうと思ふ。〔倉田淳之助〕